

2020年5月14日

公益財団法人 庭野平和財団 2019年度活動助成報告書

北東アジアの平和構築に寄与する「大学生交流」の基盤づくり

■報告者

KOREA こどもキャンペーン(Relief campaign committee for Children, Japan)

共同代表：松本智量(アーユス仏教国際協力ネットワーク 理事長)

今井高樹(日本国際ボランティアセンター 代表理事)

連絡先：〒110-0005 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブ One 秋葉原ビル 6F

TEL 03-3834-9808(宮西有紀)

【1】活動の目的と背景

KOREA こどもキャンペーンは、1995年に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)で起きた洪水が引き起こした飢餓に対応する緊急支援のために結成され、人道支援キャンペーンとして活動する過程で、日朝間での相互理解不足による壁を痛感し、2001年から子どもの絵画交換とその展示を通じた相互理解のプログラム「南北코리아と日本のともだち展」を他団体とともに実施しているほか、2012年からは日本の大学生の訪朝による「日朝大学生交流」を試験的に実施してきた。

団体の目的に、「朝鮮民主主義人民共和国のこどもたちへの持続的支援と、日朝両国の友好親善、21世紀の北東アジアの平和構築に市民の立場として寄与する」ことを掲げている。この平和構築には対話の姿勢が不可欠であり、対話の場としての「市民交流」の機会を増やすこと、そこに北朝鮮を含めていくことが、現状改善の手段と考えている。

2019年は、6月に板門店で米朝首脳会談が実現したものの、その後の対話は進まず、朝鮮半島をめぐる情勢は不安定であった。また、日朝関係は膠着状態のまま、さらに徴用工問題や輸出規制で日韓関係が悪化の一途をたどるなど、朝鮮半島および東アジア地域の平和を考えるなかで、日本の存在感が薄れていることが憂慮される。

【2】活動報告と実施内容

2019年度は、事務局インターンと、日朝の大学生交流のリーダー制を導入し、事前打ち合わせを重ねることで彼らの提案を取り入れたプログラムの実施が実現した。本事業へ関心を寄せる大学生も増え、8月には大学生9名(うち、7名が初参加)と、新たに1名の大学教員が訪朝に参加した。

1) 学生リーダー・インターンの導入。

事務局インターン(1名)は、「日朝」大学生交流の参加経験者でもあったため、初参加

の大学生のサポートに回ると同時に、韓国語を活かして子ども絵画交流の運営にも深く関わった。学生リーダーは関東・関西それぞれ1名が担い、事務局と学生のパイプ役を果たした。

## 2) 「東北アジア大学生平和交流プログラム」の実施。

2年目となった大学生交流は、「東北アジア大学生平和交流プログラム」として、全5回の勉強会（フィールドワークを含む）と朝鮮訪問、のべ4回の報告会、韓国語講座（韓国研修の代替プログラム）を実施した。前年度のメディア掲載・出演増加の影響か、関心表明をする学生が増え、プログラムには延べ22名が登録した。うち9名が「日朝大学生交流（7回目）」に参加した。平壤では、初めてスポーツ交流も実現し、ワークショップでは終日、充実した意見交換も出来た。さらに、朝鮮側に交流の意義を評価され始めたことで、新たに金日成総合大学との交流も実現した。

また、前年度同様、教員サポーターである大学教員が、勉強会の講師や報告会でのファシリテーションなどにより、プログラムをサポートした。3月に韓国研修（日韓交流体験）に4名が参加予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大の懸念から訪問を中止した。その代替プログラムとして、同教員による韓国語講座を実施、2名の学生が参加した。

### ■別添資料

活動詳細については、別添資料を参照。

- 【別添1】2019 プログラム案内
- 【別添2】2019 活動内容
- 【別添3】2019 活動写真
- 【別添4】2019 参加学生感想
- 【別添5】2019 メディア掲載

### 【3】活動の成果

#### 1) 若者たちによる自主的な動きの高まり

学生リーダーやインターンは、主体的に「日朝大学生交流」の企画に参画し、また、自らテーマを決めての「自主ゼミ」を開くなど、それぞれが関心分野の学びを深める活動を行っていた。その中でも、インターンは、自らの経験を通して「大学院の学びとは違う実務的アプローチで東アジア、朝鮮半島の平和構築と向き合ったことで、継続的な人対人の交流が信頼関係構築には何よりも大切などということを、頭や理論ではなく、自身の体験をもって知ることができた。」と感想を挙げている。

前項でも触れたが、本事業への関心をみせる大学生も増えており、報告会やメディアを見た4名の学生が、新年度からの本格参加を前に、フィールドワークからプログラムに加わるようになった。また、参加学生が子ども絵画交流にもボランティアとして関わる等、着実に関わる若者は増えてきている。特に、2020年度の学生リーダー・インターンは、すべて「自主的な申し出」によってメンバーが決まった。

さらに、大学生交流のOBOGによるゆるやかなグループ「竜岳山アルムナイ」が発足し、交流の経験を共有する自主的な動きが出始めている。なお、現在、「アルムナイ」のメンバーによる報告書作成が進行中である。2020年度は、「アルムナイ」メンバーが勉強会にオブザーバー参加するなど、さらなる経験交流を取り入れる予定である。

## 2) 大学教員サポーターとの協働の広がり

2019年度は、大学教員サポーターとの協働が広がった。新たに、同志社大学、早稲田大学で、学生が「日朝大学生交流」に参加したことがきっかけで、両校の教員サポーターの授業で学生たちが訪朝報告を実施したり、同志社大学と当キャンペーンとの共催で、報告会も開催することができた。また、教員サポーター企画による神奈川（川崎、横浜、横須賀）でのフィールドワークも行うことができ、学生14名が参加した。

さらに、韓国研修が中止になった際には、同行予定だった教員サポーターからの提案で、急遽、代替プログラムとして韓国語講座を実施することができた。

### 【4】今後の課題

事務局に新しいスタッフを入れて活動してきたが、朝鮮総連や財務省など、省庁関係で交渉を必要とする場も少なくなく、また、学生を束ねていく場面も多い。そして、関わる若者が増えてきている中で、彼らが「継続的に」集うことができるよう、確固たるフォロー体制を築くことが求められる。そのためにも2020年度は事務局体制を再構築する。

2020年度は、大学教員サポーターとの連携をより強化し、参加する大学生たちが安心して、活動できるような環境づくりを模索していく。特に、東アジアの平和構築について関心を持ち続けてもらえるようなコンテンツ選びができるよう、アドバイザーとの関係づくりに注力していきたい。

また、「資金調達」は引き続きの課題である。情報収集と協力者のアドバイスや紹介も得ながら、「平和構築」「相互理解」に関心のあるドナー開拓、そして、新しいチャレンジ（クラウドファンディング）にも取り組んでいきたい。

最後に、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、年度末に予定していた計画が一部実施出来なかった。今後は、こうした不測の事態に備えて、インターネットを活用して、遠隔からも参加できる仕組みを作ることが求められる。これを機会と捉え、大学生が自主的に参加し、考え、そして意見交換を通じて学び合う方法について、代替案をいろいろ試していく。

以上